

鳥取県米子市

史跡米子城跡発掘調査 現地説明会 2018 資料



国史跡米子城跡全体図

平成30年 4月 21日 [土]

米子市文化振興課

平成29年度 史跡米子城跡発掘調査の成果について

米子市では、現在「史跡米子城跡保存整備事業」に基づき、史跡内の内容確認を目的とする発掘調査を、平成27年度から進めています。

平成29年度は本丸北東側で、既存の絵図には描かれていない^{たてぼり}豎堀を確認することができました。

豎堀とは、斜面を登るように設けた堀で、敵の横方向への斜面移動を遮断するもので、中世の山城などで多く作られた防御施設です。

今回確認された豎堀は、二の丸枳形から本丸番所跡方向に直線的に延びています。堀の全長は約63m、堀の幅は上端で約13m、深さは北壁側が約6m、南壁側で約2mを測り、北側は急崖となっています。堀は、麓部分では城山大師裏の^{きりぎし}切岸（人工的な^{がけ}崖）に繋がり、山頂の天守下の番所跡付近では堀の底は広がり、切岸に囲まれた空間となっています。この豎堀は、平成28年度に確認された「登り石垣」と対になっており、湊山北麓にある二の丸をハの字状にこの2つの防御ラインで、守っていたことが考えられます。

今回の発掘調査成果から、米子城は天守を中心に、尾根や谷の自然地形を生かした防御構造をもつ戦国時代の山城の性格も併せ持つ城であり、登り石垣と豎堀がセットで機能していたことがわかってきました。

また、今回の調査では、本丸側の豎堀の底から月山富田城と同じ文様の^{のきひらかわら}軒平瓦が出土しました。この瓦には^{こづち}小槌の左右に^{ほうじゆ}宝珠を配した中心飾りの左右に^{からくさもん}唐草文が配されています。これはまた、岡山城でも確認されている瓦の文様であり、^{きっかわひろいえ}吉川広家の時代の瓦と考えられています。過去に^{いいのやま}飯山（^{うねめまる}采女丸）では採集されていましたが、本丸のある^{みなとやま}湊山においては今回が初めての出土であり、このことから、吉川広家の段階で、湊山山頂に^{かわらぶき}瓦葺建物が存在していたことが推測でき、出土遺物からも吉川広家が湊山の本丸に建物を建てていたことを裏付けるものです。これは築城初期の米子城の姿を考える上で非常に重要な資料であるとともに、月山富田城・米子城主の吉川広家と、岡山城主の^{うきただひでえ}宇喜多秀家が、同系統の瓦工人集団を抱えていたことを示し、2人の城主が強いつながりを有していたことを示す遺物としても重要です。



堅堀位置図



堅堀全景

堀を使った防御のしかた

堀を効果的な箇所に設置することで、たとえ敵が大軍であつても十分に迎え撃つことができた。

よこぼり横堀

曲輪に沿って長く掘った堀。曲輪に向かってくる敵は、容易に曲輪に上がることができなくなった。

側面からの侵入を防ぐ！

たてぼり縦堀

山の斜面に、タテ方向に設けた空堀。尾根筋を通り堀切りで進路をはばまれた敵が、次に山の斜面から城内へ侵入しようとするのを防いだ。

ほりき堀切り

山の尾根を断ち切って、敵の接近を阻止するための堀。味方の移動には橋をかけ、敵が迫ると橋を落とすこともあった。

尾根を断ち切る！

斜面の横移動を封じる！

うねじょうからぼりぐん畝状空堀群

縦堀と土塁を並べて築き、畝状にした堀。敵の横移動を阻止する。縦堀が何本もあるとより効果的に。

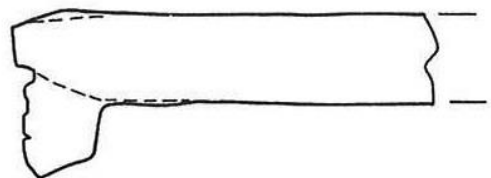
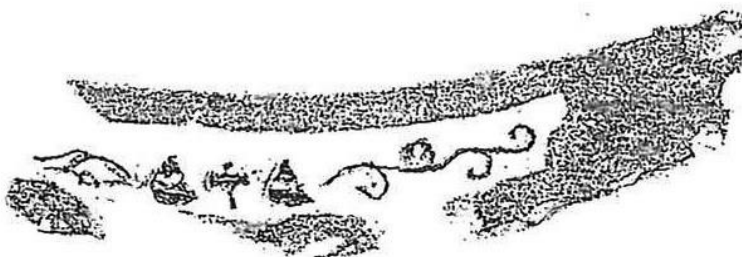
標的にしやすくなる！

自由に動き回れない！

しじり障子堀

土手で格子状に区切った堀。敵が堀の中を移動しにくいようにした仕掛け。底には泥を入れて、敵の足が取られるようにした。

堀を使った防御のしかた
(千田嘉博監修 2017『日本の城事典』
ナツメ社より転載)



0 10cm

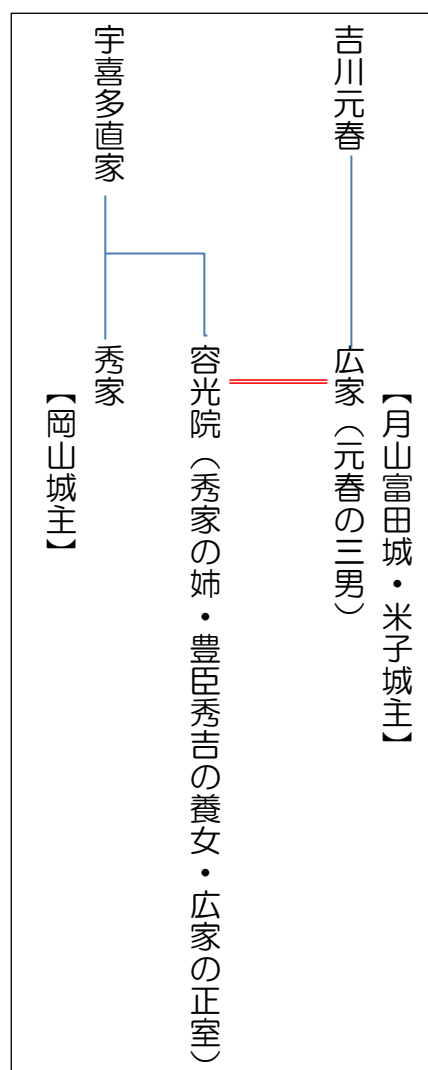
縦堀出土軒平瓦



豎堀の調査トレンチ（麓から番所跡を見る）



豎堀の高低差（手前が深浦側）



米子城関連年表

米子は 1467 年の応仁の乱の時に砦が築かれる以前に漁師町あるいは港町として成立していました。

応仁 1 年（1467）～ 応仁の乱 米子飯山に山名宗之が砦を築く。

大永 4 年（1524） 5 月 尼子経久伯耆に侵入 米子城、淀江、尾高などの城を攻め落とす。

永禄 5 年（1562） 毛利元就の富田城攻め、因幡、伯耆へも進出。

永禄 9 年（1566） 富田城陥落。山陰地域は毛利支配下に入る。

元亀 2 年（1571） 尼子氏再興運動、尼子勝久・山中幸盛因幡・伯耆へ侵攻。

天正 6 年（1578） 尼子勝久上月城で自刃 尼子氏滅ぶ。 この頃の米子城番は古曳吉種。

天正 9 年（1581） 鳥取城落城、秀吉が伯耆一円を支配。

天正 13 年（1585） 秀吉と毛利輝元の和睦 八橋以西の伯耆三郡が毛利領となる。

天正 15 年（1587） 吉川広家（吉川元春の三男）、吉川家の家督を継承。

天正 19 年（1591） 吉川広家が秀吉から西伯耆、出雲、備後など 12 万石を認知され、富田城に入るが、居城を米子に変え、山県九左衛門を奉行として築城開始。

文禄 1～慶長 3 年（1592～1598） 文禄慶長の役（朝鮮出兵） 吉川広家従軍、

古曳吉種は朝鮮で討ち死（1592）。慶長 3 年 8 月、秀吉死す。

吉川広家、富田城に帰り、湊山築城を監督、米子港、深浦港整備。

慶長 5 年（1600） 関ヶ原合戦 吉川広家西軍として出陣。

吉川広家、周防国岩国（3 万石）に転封、この頃城は 7 割方完成。

駿河国府中城主、中村一忠（18 万石）が伯耆国領主となり尾高城に入る。

慶長 7 年（1602） 中村一忠、尾高城から完成した米子城に移る。

慶長 8 年（1603） 中村一忠、家老の横田内膳を暗殺（米子城騒動）。

慶長 14 年（1609） 中村一忠 20 歳にて死、中村家は断絶。

慶長 15 年（1610） 岐阜美濃国黒野城主加藤貞泰、伯耆国会見・汗入郡 6 万石領主となり入国する。

元和 1 年（1615） 大坂夏の陣、豊臣氏滅ぶ。幕府は一国一城令を発布するも、米子城は温存と決まる。

元和 3 年（1617） 加藤貞泰、伊予国大洲に転封、

因伯領主となった池田光政の一族、池田由之が米子城預かり（3 万 2 千石）となる。

元和 4 年（1618） 池田由之死亡、子由成が米子城主となる。

寛永 9 年（1632） 池田光仲、因伯支配（32 万石）、家老荒尾成利が米子城預かりとなる。

嘉永 5 年（1852） 四重櫓と石垣を鹿島家の負担により大修理。

慶応 4 年（1868） 明治維新。

明治 2 年（1869） 朝廷より米子城返上の命令あり。

明治 5 年（1872） 米子城山は土族小倉直人らに払い下げとなる。

明治 6 年（1873） 城内の建物類は売却され、数年後取りこわされる。

かるちゃんのちょっとお城の用語解説



郭(くるわ) (曲輪)

城の内外を土塁、石垣、堀などで区画した区域の名称。本丸、二の丸、三の丸など主要な廓内には、城主の居所のほか、兵糧を備蓄する蔵、兵たちの詰所などのほか、郭の出入り口である虎口を閉める門や、堀、物見や攻撃を与える櫓（やぐら）が建てられた。

切岸(きりぎし)

斜面を人工的に削って絶壁にして、敵が登れないようにした崖。

近世城郭(きんせいじょうかく)

織田信長の安土築城以後に普及した、石垣や瓦葺きの天守などを持つ城を指す。地域や支配者によって差がみられる。

御殿(ごてん)

政庁の場所でもあり、城主とその家族の住まいでもある建物。公的な空間である「表御殿」と、私的な空間である「奥御殿」がある。

本丸、二の丸、三の丸(ほんまる、にのまる、さんのまる)

近世では城の中心となる郭は本丸と呼ばれ、本丸に天守が設けられることが多かった。二の丸、三の丸といった呼称は、本丸からの位置関係によるもの。

竪堀(たてぼり)

敵の横方向の移動を防ぐため山の斜面と平行に縦（竪）に掘られた空堀のこと。

天守(てんしゅ)

城の中心に建てられた高層の櫓。「天守閣」は俗称。

土塁(どるい)、石垣(いしがき)

敵の攻撃、侵入を防ぐために、城の外周や郭の周囲に土を持って固めた施設のこと。

近世城郭では土塁に代わり、土塁壁面に石を積み上げた石垣が主流となる。

縄張(なわばり)

城の曲輪や堀、門、虎口等の配置をいう。城郭での戦いの勝敗を決める要素の一つに、城郭の形状・構造が挙げられる。そのため築城に際してなるべく防御側に有利になるよう、城郭の立地なども考慮して縄張が決められ曲輪が配置された。縄張の基本は城郭の核となる本丸の周囲に、二の丸、三の丸を効果的に配置することにある。

登り石垣(のぼりいしがき)

尾根を登るように築かれた石垣。豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の時に秀吉軍が朝鮮半島南岸に築いた倭城に多く用いられた構造物で、城域の遮断線や、山上と山麓の一体化、港湾防御などの目的を持つ。

枡形虎口(ますがたこぐち)

四角形の小さな広場である枡形と2つの城門を組み合わせた二重構造の出入り口のこと。敵の直進を防ぐために直角に折れ曲がっている。敷地から飛び出すように築かれたものを外枡形、敷地内に取り込まれたものを内枡形という。

堀(ほり)

敵の進撃をはばむための人工的な大溝で、水のない堀を「空堀」、水のあるものを「水堀」と呼ぶ。

櫓(やぐら)

主に郭の隅などに築かれた建物で、監視や攻撃の拠点としての役目を持つ。近世城郭では単層の平櫓、二重以上の櫓、長屋のような多門（多聞）櫓など多様化し、天守の代用となる櫓もあった。



伯耆国米子城絵図

(文久3〔1863〕年9月)